# 北極圏の空からとらえたコロナ

（北極圏シベリア皆既日食観測ツアー報告）

山下俊樹

ハバロフスクの空は２昼夜にわたり快晴そのものであった。昼間は暑くとも夜は寒い位の涼しさの中に、サソリや土星が低く輝き、高度５０度近くの北極星はそれ以上に高く感じられた。余りにも良すぎる天気に一抹の不安を抱きながら星空を味わっていた。

マガダンは、白夜でない訪問地としては今回最北にある。北極星は高度６０度、本当に頭上ともいえる感覚で見えた。あと３日後に太陽を隠す細い月が、地平線にほぼ直角に立っているのが見えた。そしてマガダンでもほぼ晴天が続いた。

そしてペベックを経て向かった観測地チェルスキーでは、イルクーツクの原住民の歓迎団が待っていた。共産党本部へも招かれて、われわれ一人一人に日食記念メダルが渡される歓迎もされた。しかし、チェルスキーの空はこれまでとはうってかわって曇りだつた。

現地に到着したその日に地上での観測候補地を下見した。そして日食前日には、小雨の中でクリノメーターを頼りにその予定地での方位を測定した。

いつのときでも、見えない場合が有り得る覚悟は割り切ってもつべきである。反面、晴れてくれることへの期待と願いは、それにも増して大きい。チェルスキーの澄んだ大気のもと、しっかりと大地に機材を据えて最盛期に近いコロナの観測が出来ることを期していた。

前々から万が一に備えてチャーター機をツーリストから交渉してもらってはいた。今回アドバイザーとして参加した私は、まだ天気が良かったマガダンでのミーティングにおいて、一般的な話として、機上観測の場合の事を述べておいた。チャーター機確保の保証がなかったその時点では、公表は出来なかったからである。そしてチェルスキーへ着いてチャーター機確保が保証されていることがわかった。そして天気は下る一方であった。機上観測を十分に覚悟しなければならず、その前提のもとに何度もミーティングを重ねた。①飛行機を飛ばすか飛ばさないかの判断の方法。②乗る人乗らない人に希望が別れた場合のこと。③窓の割り当て。④観測交代の方法。⑤費用。・・・・・・・・こうしたことが、それぞれ単項目の内容ではおさまらず、複雑に絡み合って議論は白熱した。私はアドバイザーの立場からまとめ役にならざるを得なかった。こうした緊迫状態では、えてして意見が交錯しがちなものである。しかし我々のグループのミーティングではそうした事はなかった。互いに相手を尊重しながらの議論であったことが、チームワークのとれた民主的なものとなり、白熱の中にも楽しさがあった。

日食当日は激しい雨天となり、地上の観測地へ向かう必要はなかった。外国の観測隊も飛行機を必要としたが、イーストツアーの方の事前の確約で、３機のうちの１機がわれわれのグループのために確保できた。そして天気は荒れ模様となり、雲は厚そうであった。

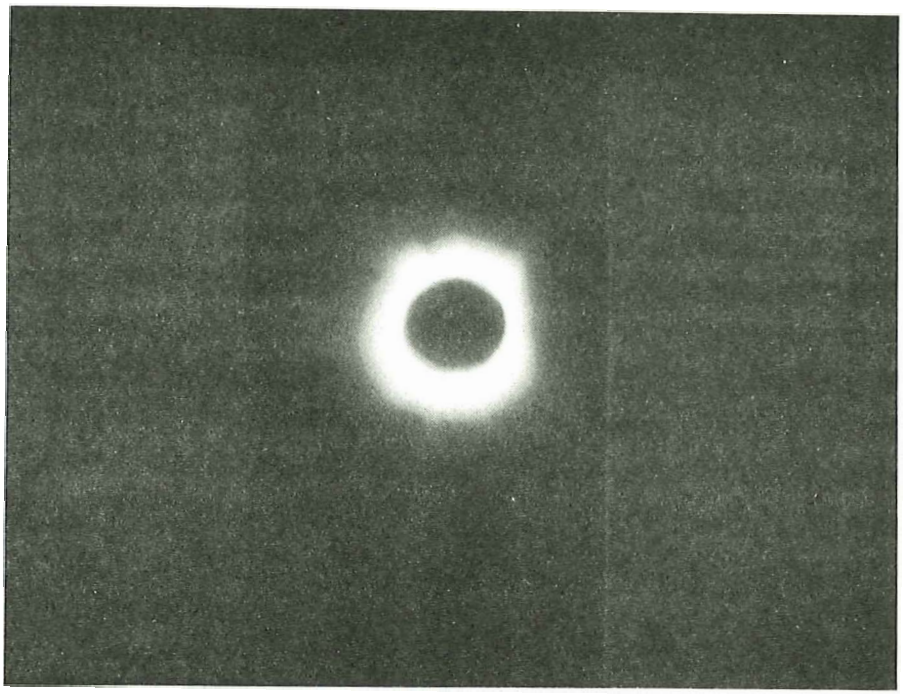
各国の代表者にまじって、山口正博先生と私も共産党本部での状況説明に参加した。「天気は西から東へと移り、大量の雲が運ばれてきている。日食の時刻にチェルスキーの天気は最もひどくなる。雲の高いところは５０００～６０００ｍのところあり、飛行機の上昇限界は４０００ｍである。偵察の飛行機を飛ばして、雲の薄いところを探している。・・・・・・」というものであり、偵察機の情報待ちとなった。

いよいよ飛び立てる事になった。一時は悪天候で予定の機種では飛べず、外国隊に同乗させてもらうことになりかけた。だが最終的にはわれわれのグループのチャーター機で可能ということになり、（地上に残ることを希望された一人を残して）急遽飛び立った時は、皆既まであと３０分程を残すだけというきわどさであった。機種は民間機であるが、軍人のパイロットが操縦にあたった。飛行経路は、大まかにいえば皆既帯を西から東へ向けて飛んだ筈である。そして４０００ｍ上空で雲の上に出た。

飛び立って間もなく、グループの代表者にはコクピットへ入ることを許可された。私は決してグループの代表者とは思っていないけれど、誰に行ってもらうかを時間をかけて決めている余裕もないので、皆さんの言葉に甘んじて私が行かさせていただくことにした。そして第３接触までの時間に合わせたタイマーを添乗員の方に渡して、皆既が始まるまでの時間を小刻みに伝達してもらうよう依頼した。コクピット後部の天窓は、機体がどちらを向いても太陽を見失うことはない確かに良い場所であった。事実、一度機体は雲に出会って方向を変えたが、そのときでも常に太陽をとらえ続けることができた。しかしこの場所は写真撮影には不向きな所であった。やむを得ず、心はなかば肉眼による観測ならぬ観察に切り替えた。小さくしかし鋭く輝くダイヤモンドリングで皆既は始まった。コロナは黒い太陽をまるく囲んだ極大期の典型を示していた。いくつかのプロミネンスがあり、殊に太陽に向かって左上のは大きかった。西側すぐ近くに木星が、大きく離れて金星があざやかに輝いていた（水星は見落としたが）。白夜の地方に起きるつかの間の暗い昼間に、万が一との淡い期待をもったオーロラはやはり現れなかったようだ。そして反対側の大きなダイヤモンドリングで皆既は終わった。空港に戻る機中は、喜びを分かち合う握手と乾杯で充ちた。全員のチームワークでとらえたコロナである。「皆さんみんなで見ることができて良かった」しみじみとこんな思いで私はほっとした。

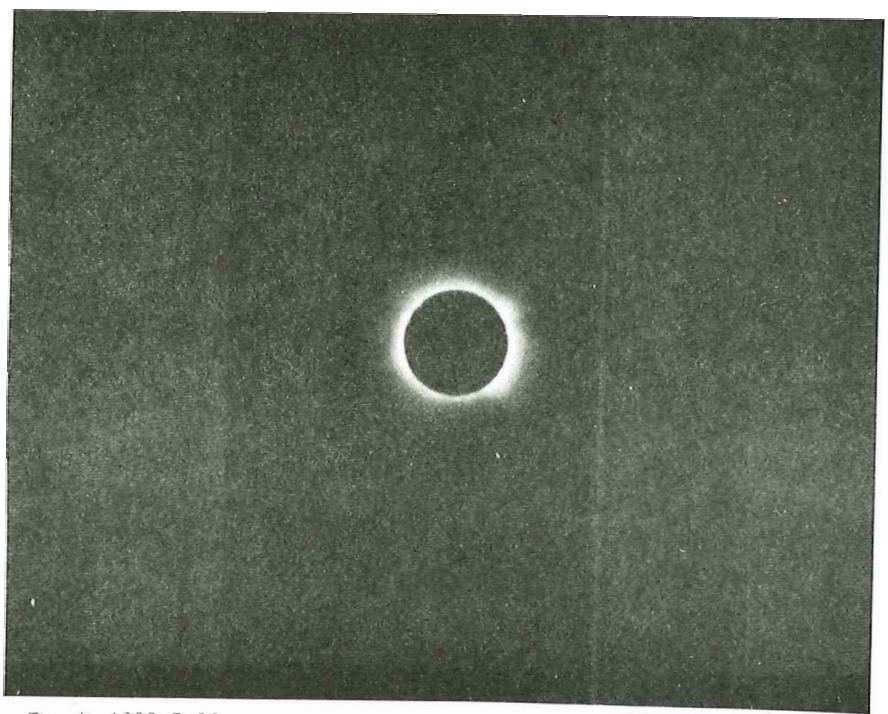
今回の日食観測旅行は、私にとっては出発前から幾つかのイメージが重なっていた。３度目のソ連での日食、そしてアラスカ・ノアタックに続く白夜の地での日食、そしてもうひとつノアタックでも味わった蚊の大群。それに加えて、２年前に小笠原上空から行った機上観測までもが、ここに再現されたのである。

小笠原上空からの機上観測では機体は激しく振動した。それにひきかえ今回は安定していた。ただ、素晴らしかったとはいえ、日食そのものから受ける感動には小笠原の時程のものがなかったのは何故だろうか。なにわともあれ、われわれのグループ１５人と、我々の観測の裏付けとなる困難な交渉等を綿密にして下さったイーストツアーの方々、そして語学の天才ともいえるソ連の添乗員の方、こうしたみんなのチームワークでとらえた日食であった。



データ：1999. 7. 22. 14h52m頃、　　撮影　大江和彦 氏

ｱｻﾋﾍﾟﾝﾀｯｸｽK2、ﾀﾑﾛﾝ200mmF5. 6、1/8sec、FUJICOLOR100



データ：1999. 7. 22.　　撮影：加古明人 氏

OlympusOM2SP、ﾀﾑﾛﾝ180mmF2. 5、(F=4・AUTO)、KONICA400